

## 「手話でつながる国と人」

坂井市立三国中学校 3年 山崎 彩夏 (やまざき さいか)

私たち日本人は、小学5年生から高校3年生までの8年間、学校で英語を学習します。英語という世界共通語を習得できれば、言語の違う人々と話しをすることができ、自分の世界が広がることでしょう。

ところが、日常会話程度の英語を話すことができる人は、実は人口の10%程度しかいないのです。8年かけてもたった10%です。これは割にあっているのでしょうか。

このように英語を8年間勉強した成果に疑問をもつ中で、それならば『手話』を勉強するべきだと私は考えます。

9歳の時、私の左耳が突然聞こえなくなりました。突発性難聴でした。右耳を塞ぐと音がしなくて、このまま聞こえないままかもしれないと何度も不安に思いました。けれど私の場合処置が早く、標準治療であるステロイドがよく効いたため、若干低いものの許容範囲内の聴力に回復できました。私は運がよかったのです。突発性難聴は治療開始までの時間がとても重要な病気です。時間が経つ毎に回復する確率がどんどん落ちてしまいます。あの時、「聞こえにくいだけ」「そのうち治る」と自己判断をして母に黙っていたら、私の聴力はどうなっていたかわかりません。あの時の判断と行動が違えば、聴力はここまで回復しなかったと思います。この経験から私は手話というコミュニケーションを大切に考えるようになりました。

ある日急に左耳が聞こえなくなった恐怖心は、ずっと私の心に残り続けています。ですが、一時的に…しかも片方が聞こえなくなっただけの私が抱いた恐怖心の、何倍何十倍もの不安を、耳の不自由な方は日頃から感じているのだと知る経験にもなりました。しかし現実を見ると、手話のできる人は全人口のたった0.06%しかいないのです。あまりに少なすぎると感じませんか。

耳が不自由な人は日本におよそ1,994万人いるとされています。それは全人口の約15%に当たります。英語を話せる人の割合が人口の10%、耳が聞こえない人の割合が15%。統計上耳が不自由な人の割合の方が多いのです。ということは、英語を使って会話をする日本人よりも、手話を使って会話をする日本人の方が多ということです。それならば、英語のように学校で手話を学習してもよいのではないのでしょうか。

この世の誰しもが、事故や病気で突然耳が聞こえなくなる可能性があります。それなのに、日本は諸外国に追いつこうと、身近に起こりうる可能性を考えていないように思えます。海の向こうでは、手話を公用語としている国もあります。しかし、日本では手話を学習する機会がほとんどありません。私は手話を『耳が不自由な人の気持ちを知るための大切な言語だ』と考えています。

私の願いは、この社会を、耳が不自由な人たちにとって過ごしやすい環境に近づけていくことです。そして、『手話』という立派な言語が話せる人を増やしていきたいです。

とは言っても、手話というものは世界共通ではなく、国や地域によって表現が異なります。私の思いを実現するためには乗り越えていかなければいけない高い壁があるのも事実です。どうすれば、私が願う世界を実現できるのかと調べている中で、大木洵人さんの活動を知ることができました。大木さんは、ビデオ会議を利用した遠隔手話通訳サービスや、手話キーボードを使ったオンライン手話辞典などの手話サービスを手がけ、手話の世界共通化を実現しようとしている方です。

私は手話の素晴らしさと可能性を多くの人に知ってもらい、手話に興味を持ち学ぼうとする人を増やしていきたいです。手話が、国と国、人と人を繋げ、笑顔に満ちた優しい世界になるきっかけになると信じています。